博士論文の要旨及び審査結果の要旨

氏　　名	LOCHIN Ishtseren
学　　位	博　士（文学）
学位記番号	新大博（文）第 11 号
学位授与の日付	令和 3 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 3 条第 4 項該当
博士論文名	モンゴル遊牧王朝における鉄器生産の研究
論文審査委員	主　査　教　授　白石　典之
	副　査　准教授　飯島　康夫
	副　査　准教授　広川　佐保
	副　査　愛媛大学　教　授　村上　恭通
	副　査　愛媛大学　准教授　笹田　朋孝

博士論文の要旨

本論文は，乾燥・寒冷の極限的な環境にあるモンゴル高原で，匈奴，突厥，モンゴルなどの強大な王権（本論では「モンゴル遊牧王朝」とよぶ）が成立した背景の解明を目的としている。方法としては，騎馬の優位性や巧みな戦術といった論証の難しい従前の研究視点にかわり，軍事力を支えた武器や馬具の原材料となった鉄という物質資料に着目することで，実証的な分析を行った。その結果，モンゴル遊牧王朝の成立には，鉄資源の調達の成否と鉄器生産の技術革新が，大きく関連していたと明らかになった。

本論の構成は以下の通りである。

はじめに

第１章　鉄器生産をめぐる諸問題

第２章　周辺地域における鉄器生産

第３章　古代における鉄器生産

第４章　中世前半における鉄器生産

第５章　中世後半における鉄器生産

第６章　鉄器生産の展開

おわりに

第 1 章では，鉄について論じたモンゴル史の先行研究を検討した。従来，モンゴル高原は周辺地域に比べて鉄資源に乏しく，技術も劣っていたとみなされ，モンゴル遊牧王朝の外征

の目的のひとつが鉄の略奪にあったと考えられてきた。しかし，近年のモンゴル高原における考古学調査で，数多くの製鉄遺跡が見つかってきたことを踏まえ，いままでのモンゴル遊牧民の鉄との関係に対する先入観を改めるべきだと述べた。

第 2 章では，モンゴル高原の鉄器生産の系統を知るため，鉄の先進地域であった中国と，古くから内陸アジアにおける鉄生産の中心であった南シベリアの資料を比較検討した。その結果，モンゴル高原の鉄器生産は，鋳鉄よりも鍛鉄を用いた点や，製鉄炉の形態や技術からみて，中国よりも南シベリアに系統をたどれることがわかった。

第 3 章では，モンゴル高原で鉄器が出現した紀元前 4 世紀から，本格的に使用された匈奴期（紀元前 3～紀元 1 世紀）までの鉄器生産について検討した。モンゴル高原での鉄の初源は中央アジアに由来し，つづく匈奴期では，モンゴル高原各地で南シベリアに系譜をもつ製鉄技術を用いて鉄器生産が行われていたことを明らかにした。

第 4 章では，鮮卑（2～4 世紀），柔然（402～552 年），突厥（552～744 年），ウイグル(744～840 年)，契丹（916～1125 年）時代の製鉄資料から，それぞれの王朝における鉄器生産を検討した。その結果，鮮卑期からモンゴル高原西部のアルタイ地方に製鉄工房の集中が見られるようになり，炉の大型化と数次使用化が進行し，突厥～ウイグル期には大量生産が行えるようになったことを明らかにした。ところが，契丹期になるとアルタイの製鉄は廃絶し，モンゴル高原全体でも製鉄がみられなくなることを示した。

第 5 章では，モンゴル帝国時代（1206～1388 年）のモンゴル高原における鉄器生産を検討した。鋳鉄棒状インゴットを金朝や西夏などから調達し，鍛造に特化した鉄器生産が行われていたという先行研究の妥当性を再確認した。その上で，鍛冶炉の特徴から，工人集団にシベリア系と中国（西夏）系が存在していたことを明らかにした。

第 6 章では，以上の結果を踏まえ，鉄器生産とモンゴル遊牧王朝興亡との関係を検討した。匈奴では単于以外に地域集団の首長も鉄工集団を抱え，自給自足の鉄器生産を行った結果，漢に対抗できる軍事力を有することができたが，反面で，被支配部族の自立成長を促すことになり，瓦解につながったと述べた。鮮卑以降はアルタイ地域で製鉄の効率化と量産化がはかられ，そこからモンゴル高原全土に向けて鉄素材が供給されていたと想定した。このことはアルタイ地域の部族の自立成長を促し，突厥の勃興につながったと考えた。この生産形態はウイグルにも踏襲されたが，契丹支配期になるとモンゴル高原の製鉄が途絶えた。その原因は契丹の支配と鉄の禁輸にあった。そのなかで製鉄を自前で行わない替わりに，鋳鉄製品の廃材を素材に用い，鍛造で製品を生み出すという鉄器生産が広くみられるようになったことを示した。モンゴル帝国では規格化された鉄素材の導入で武器の効率的な生産を行い，軍事力を高めたという説を，素材鉄と鍛冶炉の分析を通して追認できることを実証的に示した。

このような検討結果から，鉄資源の確保の成否と鉄器生産の技術革新が歴代モンゴル遊牧王朝の興隆に果たした役割は大きかったと結論づけた。

審査結果の要旨

本論文は，自然環境の厳しいモンゴル高原において，遊牧民が強大な王朝を建てられた理由の解明という，世界史的な課題へ取り組んだ意欲的な研究である。これまでの馬の優位性や巧妙な戦術を強調する実証性に乏しい視点ではなく，鉄という当時の武器・馬具に欠かすことのできなかった素材に着目し，考古学的分析による客観的データを積み重ねることで，王権成立の背景を考察している。同様に鉄を重視する研究は，モンゴル帝国史の分野で，すでに他の研究者によって進められているが，モンゴル高原で鉄が用いられ始めた紀元前 4 世紀からモンゴル帝国まで通時的に扱った研究としては，本論文が初出である。

分析は，製鉄炉の形態分類といった考古学の基本的方法を用いた手堅い方法に加え，理化学的分析を踏まえた客観的かつ実証的なもので，説得力のある結果が得られている。分析対象は，本人の踏査で発見され，主体的に発掘調査に携わった遺跡から出土した資料が中心で，しかも製鉄遺跡としてはモンゴル高原で初例のものも含まれているという点で，独創性はきわめて高い。結論は，文献史料を踏まえた堅実な部分に加え，遊牧伝統を熟知した視点からの斬新な解釈もみられ，今後のモンゴル遊牧王朝史研究において，参照が必須になると思われる高い水準の論文であると評価できる。

その一方で，契丹時代の鉄器生産については，検討できた資料数が少ないため，他の研究者の成果を引用した部分の割合が大きくなり，論拠が乏しく，独善的な解釈も見受けられた。また，モンゴル帝国期の鉄器生産を，製錬はなく，鍛錬に特化していたと断言しているのは，遺跡調査例が少ない研究の現状を踏まえると，いささか性急な解釈といえる。しかしながら，理化学的分析結果を多分に援用することで，いかなる理由で製錬が衰退し，鍛錬が主体化したかを論じた箇所には参考にすべき点もあり，学術的価値を損なうものではないと評価した。

なお，考古学の分野では，学位名称は博士（文学）であることが多く，本研究科においても，これまで同名称の学位を授与してきたところである。

以上の審査結果から，本論文審査委員会は，全会一致で，本論文が博士論文としての水準に達しており，博士（文学）の学位を授与するに値するものと判断した。